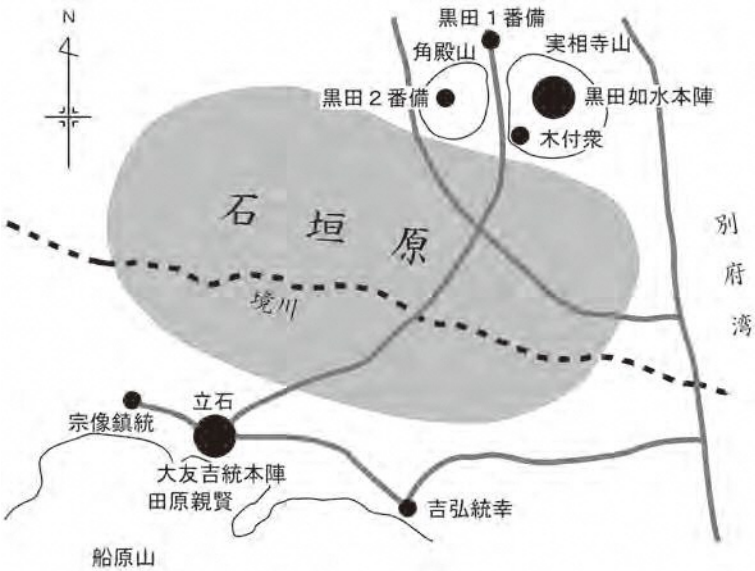
黒田官兵衛と井上周防⑩

石垣原合戦4

岡垣歴史文化研究会　羽山　健一

石垣原の北側に布陣した黒田勢は、2備の2千余人である。備とは、単独で合戦ができる部隊編成で、騎馬や徒の侍、鉄砲・弓・長柄槍の足軽、輸送を担う小荷駄など千人前後の集団である。備には、鉄砲頭（侍）の指揮下で10～20挺の鉄砲を持つ足軽鉄砲隊が2組属していた。



▲石垣原合戦略図

大友勢は、石垣原の南側で天然の要害の立石を本陣とし、右翼に吉弘嘉兵衛、左翼に宗像掃部の軍勢が展開した。その兵力は、吉統の別府上陸から日も浅く、頼みとする旧家臣団は集結途上であり、千人以下とするのが通説である。但し、突撃部隊である侍の数と鉄砲300挺は、黒田勢を圧倒していたのである。

大分市野津原本町に旧大友家臣の永冨源十郎、同与右衛門、同九郎の3兄弟の逆修墓が3基ある。逆修墓とは、生前に死後の冥福を祈って建立する生前墓である。墓には、「干時慶長五年庚子七月吉日」と刻まれている。石垣原合戦の2カ月前の建立である。永冨兄弟は、大友吉統の豊後蜂起に討死覚悟で参陣するため墓を建てたのである。現に3人は大友方に参陣し、弟2人は石垣原で討死しているのである。吉統は、徳川家康と大坂方の対立を御家再興の好機と判断し、画策していたことになる。使者や協力者を豊後各地に派遣して味方を募り、遠方の者は近場に隠れ家や集結地を定め、連絡を密にして短期集結を図ったであろう。とすれば、兵力千人以下とする説に疑問が生じるのである。今後の研究課題としたい。

1600（慶長5）年9月13日正午頃、合戦が始まった。激突3度、6時間に及ぶ激戦で、黒田勢が勝利したのである。

黒田家譜は「敵を討取事五百余人、此内冑付の首百六十七……身方にも士六十三人、雑兵八十余人討死しける、手負も多かりけり」と記し、さらに「井上九郎右衛門手に討取首数二百二十七、此内冑付七十六。野村市右衛門手に百八十八、此内冑付五十八。後藤太郎助手に六十九、此内冑付二十八。時枝平太夫手に首数十二、此内冑付五。其外にも小身の士打取し首数多あり。以上首数五百余なり」と記している。また、松井康之の報告書は「両度之合戦ニ宗像掃部・吉廣加兵衛・其外歴々八十余討取、鑓をも差出程之者ハ相果申候」とし、黒田如水の藤堂高虎宛て書状は「両三度合戦仕、宗像掃部、吉弘加兵衛、其外歴々之者数十人打取候」と記している。

松井文書の「大友義統衆討死交名」には、義統の衆討死分として、吉弘加兵衛以下侍衆の名前が記され、「都合五拾四人頭分、右之外、頭分之者手負八十人計御座候由候、九月十五日」とある。頭分の者54名を討取り、同80人を手負（負傷）にしたのである。

安部家文書は、野津原の郷士62名が大友方に参陣し、20名が討死したと記している。20人の戦死者は前述の討死交名に記載の無い人たちである。

石垣原合戦は、死傷者夥しく、稀に見る激戦だったのである。